



がわからないな」というところから、うちの師匠が気になりだしちゃったんです。あと、うちの一門は暫間(ほうかん)芸など余芸をいろいろやるというのも魅力だったんです。

会頭 ああ、そっちもやりたかったんですね。小助六さんは、かっぱれ上手いですよねえ。ちよつとできませんよ、今の人は。

松戸が舞台の古典落語

小助六 古典落語で一つだけ松戸が舞台になっている斬があつて、「紋三郎稲荷」という斬なんですけど、笠間の藩中の牧野越中守様の家来の侍が風邪を引いて江戸に出ることになり、狐の胴巻きという狐のコートみたいなのを着て駕籠に乗るんですが、駕籠屋が狐のしっぽが駕籠から出ているのを見て、これは狐だと勘違いする。で、狐のフリをして松戸まで来るんですよ。松戸の本陣の主人が代々笠間稲荷を信仰しているということになって

いるんですよ。調べたんですけど、そういう史実はないんですけどね(笑)。そこで、またお稲荷さんのフリをしてさんざんご馳走を食べて、そのまま江戸に行っちゃやう、という斬なんです。

会頭 松戸では稲荷信仰が盛んでしたが、江戸時代末期には遠いお稲荷様まで行きたくても行けない方がたくさんいたとのことですよ。

小助六 落語はけっこうウソが多いんですよ(笑)。本陣の主(あるじ)の名前も違つたりして。落語の中では高橋清左衛門とかなんとか言うんですが、本当は代々、伊藤さんですよ。調べちゃったから、自分で演(や)る時は伊藤さんに変えて演つてます。

会頭 今でも演るんですか。

小助六 あんまり演るひといなかったんですけど、せつかく松戸なんです。

会頭 どんどんいろんな場所で演つてほしいですね。

小助六 斬の中では松戸はナマズ料理が名物だということになってるんですよ。

会頭 坂川でも江戸川でも昔はナマズがいっぱい捕れたから。わたしたちもナマズ釣りをやっただんです。

小助六 本陣の高橋さんがせつかくお稲荷さんが来たついでに、「油揚げを」というと、「いやいや油揚げは食べ過ぎている。松戸はナマズ料理が名物だと聞いている」ということでナマズ料理が出るんですよ。

会頭 松戸に漁業組合あるの、ご存知ですか？ 葛西屋は昔から組合員なんです。琵琶湖から鮎の稚魚を買つてきて放流事業をやっています。鯉も放流してるし、いっぱい捕れますよ。昔は雷魚、ナマズ。組合員は80人くらいかな、流山も含めますから。江戸川沿いの農家はだいたい入つてますよ。

小助六 へえ。知らないことがいっぱいあるなあ。で、本職は何人くらいいるんですか。

会頭 4〜5人ですね。

小助六 会頭は漁をされたことは？

会頭 ないない。釣り程度ですよ(笑)。

水と緑が残るまち

会頭 今の松戸について、ちよつと話しましょうか。

小助六 松戸の中心は駅の周辺だと思つてますが、ちよつと行くと田んぼや畑があつたりと、そういうところが好きですね。21世紀の森と広場で落語をやつてくれないか、という話がありまして、下見に行つたらゴールデンウィーク中だったんで、ザリガニ釣りの子どもたちが沢山いて、こういうところに来ないとザリガニ釣れないんだなあ、と思ひました。あたしが子どものころには、家の前のドブでも釣れたのに。それはちよつと寂しい気もしますね。パブルが始まるちよつと前からこの感じに戻せたらいいんじゃないですかね。古いものは古いものとして残して、新しいものはもつと新しくしていくというのがいいんじゃないでしょうか。中途半端がいちばんよくないと思います。

会頭 そう。松戸の状況が今、中途半端。転換期ですよ。土地の区画整理の問題でも、ちよつと

目助六という今の師匠に入門してしまつたので、昼間は制服着て高校に行つて、夜だとか土曜、休日は師匠のカバン持ちをしてました。

会頭 わたしたちも三遊亭とかは知つてますが、門を叩いた雷門つていうのは、なかなかマニアックですよ。

小助六 これが落語を研究したころの影響なんですよ。寄席に通つてると、新作は別にして古典は、前に聞いた話というのが何度も出てくる。それぞれの師匠の変え方があつてそれはそれで面白いんですが、うちの師匠は、うちの師匠しかやらないネタとかが結構あつたんです。「これ初めて聞いた」とか、「これ題名

時間をかけすぎた。時代の流れを見てやっただけで、やっていくうちに時代が変わっていった。わたしも、子どもの頃、戸定の園芸学校の向こう側、岩瀬のあたりでカブトムシなんかよく取りましたよ。あの辺は谷津田だったから。商業振興という意味で中心市街地をよくするというのは当たり前。松戸のいいところというのは、それ以外にまだ水と緑が残ってるぞ、というところですね。これからの人口減少時代に、それをちゃんとっておきたい。それも中途半端ではなくて、ここ戸定が丘歴史公園で見た立派なクスノキのような木を残す感覚が大事です。松戸神社、本土寺、東漸寺などには古木が沢山あります。ああいうものをしっかりと、緑として保存することが、これからの子孫の財産になります。売人がその雰囲気の中で商いを継続できるという社会がいい。資本原理的な商売をすると文化は滅びます。天皇陛下もいらしたことがある、このような庭園が松戸にあるというところが広く知られるようになる、外国人の観光客も来るようになると思う。観光振興が呼び水になれば、商売にもつながります。そこで魅力的な商品を開発していれば、買っていく。うちもやせ我慢して商売をやっていたけれど、本物の着物を求めて買いに来るお客が世界的に増えていく時代がきつと来ると思っています。



小助六 インドと台湾で海外公演をしたことがあります。台湾では日本語を勉強している学生さんの前でしたので、日本人の反応がいいんじゃないか、という感じでした。

会頭 落語を理解する外国人が増えるといいですね。

小助六 浅草や新宿の寄席にもたまに外国の方がいらつしやいますよ。日本語が分かるのか知りませんが、浅草演芸ホールや新宿末広亭なんかは趣のある建物ですから、それだけで入ってくる人もいますよ。寄席は落語だけじゃなくて、曲芸やマジックなんかもありますから。落語ですから大きなことではないですけど、戸定邸も趣のある建物ですから、何かできかないかな、と思います。あと、地方の仕事は学校関係が多いですね。松戸でも何校か行きました。会頭 わたし70歳になるんです

が、戦後70年の教育を受けたギャップというのがあって、やっとならなくて日本の伝統文化を見直そうじゃないかという文科省の指導が始まって、高座に対して援助してくれる。しかし着物にしても、先生自体が着方を知らない。先生の親の世代は着物を自分で着ることができた。そういうギャップがあるわけです。

小助六 日本人なのに着物を自分で着られないというのも変な話ですよ。

会頭 この空白を埋めて、日本文化を知っている、国際人として恥ずかしくない日本人を育てなきゃいけないですね。

小助六 着物がなんで手を出しづらいかというと、面倒くさいとか、夏暑くて、冬寒いとかいろいろあるわけですよ。例えば着物の下にタートルネックを着たりとか、そういうことはしてもいいんだと思うんですよ。

会頭 大正時代のモボ・モガという時代はそういう着方をしていました。

小助六 今は着物はこうじゃなきゃいけないという感じに凝り固まってる気がします。

会頭 それは確かに、あんまり押し付けちゃいけないこともあるかもしれない。



小助六 例えば、小学生の前で人情斬やってもわからないわけですから、そういう時は、本筋とは違っていても、くだけた分かりやすい斬で笑ってもらうとか、とっかかりは柔らかく、それでだんだん好きになってもらえれば、と思います。

会頭 今後はどんな斬家に？

小助六 「上手も下手もなかりけり、行く土地土地の水に合わねば」という言葉があるんですが、落語って300も500も斬がありますが、小中学生だったらこの斬とか、宴席だったらこの斬とか、ネタ選びを間違えなければ、喜んでいただけるはずなんです。そういうった、臨機応変、水に合える芸人になりたいですね。